

発刊によせて

川島町長 野田知澄

この度、川島町ふるさと史料館では、川島町に伝わる幾つもの昔話しが民話集としてまとめられ、発刊される運びとなりました。誠に喜ばしく思います。

遠い昔から、木曾川という日本でも屈指の暴れん坊の大河に囲まれた自然の中で、先人達は大きな恵みに感謝しながらも、幾度となく襲う洪水とたたかいながら、また、脅えながらもみんな力で力を合わせて乗り越えて、苦難の末、いまの川島町が築かれてきたと存じます。

こうした自然の暮らしの中で、その日その日の出来事が話題が家族団らんの一ひときに語られ、これがときには面白く、また、オーバーに親から子へと昔話しとして語り継がれ伝えられてきたと思います。いずれも自然との営みに深く関わり素朴に満ちています。

末永く川島町の文化遺産として伝承されることを祈ります。

むかしむかしの川島

羽島郡四町教育委員会

教育長 西脇成紀

このごろ、川島の町を歩いていると、外国の人に出会うようになりました。

友達を訪ねて来た人、歌を歌いに来た人、くすり博物館見学の人、絵を画いている人、そんな人に、「川島って、どんな所？」と聞かれたら、どう答えましょう。

国際化は自分の町、自分の国を知らないに進んでいきません。外国の人に、この本の中のひとつを覚えておいて、話してあげてください。きっと川島はすばらしい町だなあと思うにちがいません。

この本は川島町の宝です。

お話は「むかし、むかし」で始まっています。ほんとに昔のことでしょうか。お話の心は私たちの胸に今のことのようにひびいて来ます。話の中に出て来る人、話を伝えて来た人々は、きっと今の人たちに、その心を受けついではしかなかったことと思います。

この本は川島町の心です。

川島町の人には、ひとり残らずこの本を読みましましょう。

もくじ

発刊によせて

野田知澄

むかしむかしの川島

西脇成紀

おもかる地蔵

6

たぬきの恩返し

11

牛子渡しとキツネ

16

三斗山島の人魂

20

ヤロカの大水

24

弥五七さんの供養

28

笠田の氏神さまと洪水

33

キツネのお迎え

38

チンチン石

44

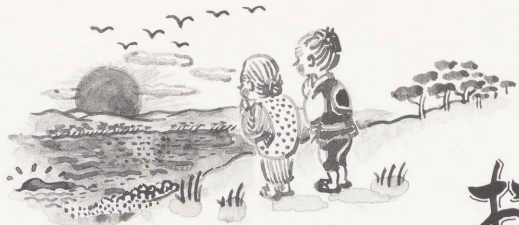
夫婦桶

50

あとがき

川瀬孝雄

おとがる地蔵



むかし、むかし、天保の前のころ、

西光坊の村里は

南側も北側も川にはさまれて

まるで島のようになっていたんだと。

その西光坊の里に

信心深い船大工の老夫婦が

住んでいました。

老夫婦は一日の仕事を終えると

川岸に立って、

「今日も一日無事に働かしていただき

ありがとうございます。」

といつもお祈りをする習慣でした。

お祈りをすまして家の中に戻ろうとするど、

※コワシ

水に流されてきん木
ぎれや朽ち木のこと

先日の大水のとき、

川岸へ拾いあげておいたコワシ※の山に夕日の光があたって、

その中からピカッと金色の光が出ているではありませんか。

びっくりした老夫婦はコワシの山を少しずつひろげてみまし

た。光のでているのはコワシの中の一つの木切れのようです。

「お前さん、これはお地藏さまだよ。」

「もったいないことじゃのう。」

コワシと間違えるなんて悪いことをした。

もと通りにしてさしあげよう。」

と川水の流れに浮かばせ、下の方へ流してやりました。

ところが何回押しても、またもとの川岸へ戻ってしまいます。

老夫婦は「このお地藏さまは、ここに住みたいので

戻ってござらっしゃるのだ。」

「村の衆に相談して西光坊でおまつりしましょうや。」

ということ、流れついた木の地藏さまを持ち帰りました。

その夜、村中の寄り合いで相談したところ





「お地蔵さまとご縁があつたんじや。

わしらみんなて

お守りしようや」

ということに話が決まり、早速小さな祠を建てておまつりしたんだと。

信心深い老夫婦は大喜び、毎日朝夕、

水やご飯をお供えして

お参りしていました。

そのうち寒い冬が訪れ、おばあさんが病気になるってしまいました。おじいさんは心配でな

りません。

地蔵さまに一生懸命お祈りを続けました。

そんなある夜、おじいさんの夢の中にこのお地蔵さまがあら

われ、

「わしはおもかる地蔵だ。願いごとがかんうか、かなわな

か、わしを持ちあ

げれるか、持ちあ

げれないかでわか

るぞよ」

というお告げがあ

りました。

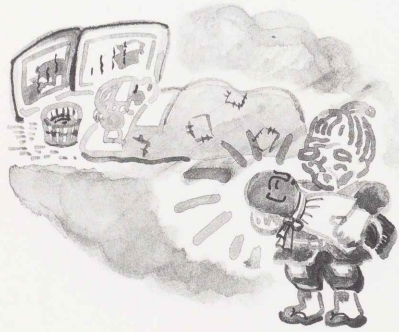
翌朝、おじいさん

はお参りしてから

早速お地蔵さまを

持ちあげてみまし

た。





弘法堂の本地蔵
(おもかる様)

弘法堂

河田町西光坊にある弘法堂には、弘法様と石地蔵がまつられています。おもかる様は本地蔵のことで、天保(1830年)以前の作と伝えられています。蓮座に文字がありますが、うすれて読めません。

現在の廟は明治の終わりごろ、村の七人の有志が八十八カ所巡拝の旅に出て、各地で募金し建立したものです。石地蔵は、七墓参りの巡拝者がこの廟に預けていったものです。

このおもかる様にお参りすると、“ポックリ”と安楽死ができるという評判。遠方からの参拝者も随分あるようです。

同じようなおもかる様は、笠田駅遊室にもあります。



弘法堂(河田町西光坊653)



すると、お地蔵さまは軽々と持ちあげることができたのです。「ありがたいことじゃ。婆さんの病気はよくなるぞ」

と喜んで家に帰り「お婆さん、喜べや、

お地蔵さまが病気がなるとお告げくださったよ」

と事の一部始終を語りました。

そしてお婆さんの病はお告げ通りよくなりました。

このことが村中に広まり、近郷からも「おもかる様」として深く信仰されるようになったんだとさ。

たぬきの恩返し

った動物が家の中へころげ込んできました。

老人はびつくりして息が止まりそうになりました。

よく見るとヤセ細ったタヌキです。

病気のせいか栄養失調のためか、まるでキツネの顔のように

どんがって見えます。

タヌキは助けを求めるように、その場にうずくまってしま



昔は至る所で見られた竹林や松林。次第に少なくなつてはいるものの近隣の市町に比べたらまだまだ多い。今でもタヌキやキツネを見たといい話はよく聞く

ずつと、ずつと昔のことです。

笠田島に大へん心のやさしい

老人がいました。

ある寒い冬の夜、

どうどう雪が降り出し、

ビユウビユウと音を立て

北風が吹き荒れていました。

老人は夜なべ仕事を終わって

大戸を閉めにかかりました。

そのとき、真っ白に雪をかぶ

ました。

老人は外へ追い出そうと思いましたが、あまりにも気の毒な姿を見て根が情深い人ですから、今、戸外へ追い出したらきつと寒さのため凍え死んでしまうだろう、

雪のやむまでと思いつつワラ束を縁の下に敷いてやりました。きつとおなかもすかしているだろうと残飯も与えました。

タヌキは縁の下でこわごわ食べ始めました。



そのうち、満腹になったらしく、ワラ束の上で寝てしまいました。翌朝、老人はタヌキを追い出そうと考えていましたが、次の日も、また次の日も雪降りでもどうとう三日間も泊めてしまいました。

四日目にやっと雪がやんだので外へ追い出しましたが、夜になると

タヌキはまるで自分の

住み家のように縁の下

へ戻ってくるのです。

そしてどうとう住みつ

いてしまいました。

タヌキは二、三カ月もすると見違えるように元気になって、

つやつやと太ってきました。

そして老人の家にタヌキが住みついたことが、村中に次々と広がっていききました。

村の若者たちは「こつそりタヌキを捕らえタヌキ汁をつくらう」と相談していました。そのことを耳にした老人は

「たとえタヌキでも神様から命を授かっ



もらい風呂の折に 語られた昔話

昔の川島町には、竹やぶや松林などが至る所にありました。木や竹などが生い繁り、人通りも少なく、動物の住み家にもなっていたようです。

古老の話では、ウサギやキツネ、タヌキなどは森や林の中はもとより、人家周辺でさえよく見かけたものだ、ということです。

そういった当時の習慣の1つに「もらい風呂」がありました。風呂をわかすと隣近所が互いに呼び合って入るというものです。そしてこの、もらい風呂で待っている間に、いろいろな昔話が語られていたとのこと。

「たぬきの恩返し」の話も、笠田町の古老がもらい風呂の折に聞いたものだそうです。

ほかにもキツネに化かされた話や、キツネが人に乗り移った話も聞いたそうですが、この話が一番印象深く、今も当家は栄えているとのこと、こうして取り上げました。



ているのだ。

そんなかわいそうなことがでできるか」と、その夜こっそりとタヌキを遠くの森へ逃がしてやりました。

その後、冬も終わり春も過ぎて暑い夏が来ました。

ある日、老人が畑仕事から家に戻ると、井戸端の桶の中に新鮮な魚がたくさん入れてありました。

近所のだれかが届けてくれたと思つて次々と尋ねましたが、皆、わかりません。

「ふしぎなことがあるもんだ」と、老人は言いながら、料理して食べました。

秋にはマツタケなどのキノコがいっぱい届けられました。

「ありがたいことじゃ。だ



れが届けてくださるのだろう。

一度お礼を言いたい……」と、老人は思いましたが、なかなか届け主は見つかりません。

ところが、ある大雪の日、だれ一人訪れる者もないのに、いつもの所に山の木の実がたくさん置いてありました。

その時、老人は雪の中に消えかけているタヌキの足跡を見つけました。

老人は「ありがたいことだ。あのときのタヌキが届けてくれたのか」と、手を合わせてうれし泣きしたそうなの

牛子渡しと

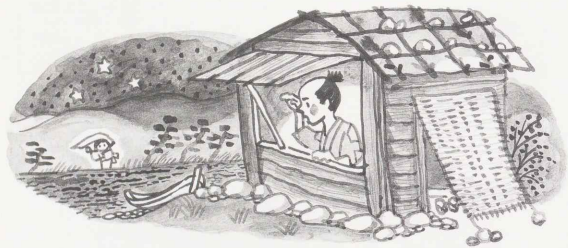
キツネ



昔、木曾川に面した松倉の牛子渡しに気の優しい若い船頭さんがいました。

独り身だったもんで、渡し場の番小屋で寝ることが多かったと。

ある晩のこと、いつものように川辺の番小屋で眠っていると、ふと、真夜中に目ざめました。



耳をすますと、人の呼ぶ声がします。

見ると向こう岸に一人の娘が立って「お渡しくださいませ」と優しい声で呼んでいるではありませんか。

「この真夜中に、どこへ行きなされる。早く家へお帰んなせい」と、なんと言うても帰ろうとしません。

しきりに手招きするので、やむなく舟を出しました。

「若い女がこんなところで、いったい何をしているのじやなも」若者が声をかけると、娘は静かに頭を上げました。

渡し場の船頭が語り伝えた

牛子渡しは別名松倉渡しとも呼ばれ、中山道那加駅（現各務原市那加）から木曾川を渡り、尾張一宮に至る古道の要所として、河田渡しとともに早くから開けました。

この物語は、渡し場に集まる船頭たちが語り伝えてきたものです。

昔、川島の中には、若い衆が夜、遊びに行くところがありませんでした。行くとしたら、川を渡った一宮が那加、盛り場の女性たちとの一夜限りの恋もあったでしょう。物語は、夜遊び先の女性との別れを象徴したものと書ってもよいでしょう。牛子渡しの対岸、下中屋村勢平島は、昔も今も民家のほとんどない松林、ロマンチックな昔話の舞台としては、格好の場であったようです。

さらに、この昔話には、次のような背景があったのではないのでしょうか。

当時の川島の主産業は船業と養蚕。質いい村で、女性の労働も大変きつかったようです。「川島に嫁をやると殺される」少々大げさですが、近在にはこんな話も伝わり、川島の若者は結婚相手探しに苦勞しました。

物語は若い船頭の夢と、現実の厳しさが交ざり合ってきたもののなのでしょう。

牛子渡しは昭和37年、下流約500mにできた川島大橋の開通で廃止され、長い役目を終えました。商人、旅人、船頭たちが歩いた船着き場の石畳も、昭和40年代の築堤護岸工事に埋もれてしまいました。

渡し場跡には、水路の安全を祈る金比羅大権現の常夜灯だけが残り、往事をしるがよすがとなっています。



呼べど呼べど、その晩は二度と姿を見せませんでした。その後、若者の娘を思う心が天に通じたのでしようか。美しい娘が夜ごとに来ては、明け方に帰っていく日が続いたそうです。

なんでも、きつねという名は、
「来て寝る」というところからついたとも伝えられています。



船を操りながらそう言いかけてはやめ、また言いかけてはやめるうちに舟は沖へ出ました。意を決めて後ろを振り返ったとき、あの器量のいい娘の姿は消えていました。

目と目が合ったとき、娘はほおをほんのりと赤くしていました。「私は家がありません。親兄弟もおりません」そう言う目のあたりのいじらしさにやるせなくなつた若者は、娘を抱き上げ、舟に乗せてしまいました。娘はうれしそうに顔を上げ、なにかうなずいたようなそぶりでした。自分の嫁にでも……。





昔、むかし、木曾川の清流の中に、三斗山島という中洲の島があったそう。

その島は三十軒ばかりの小さな村里で、まわりが木曾川の流れてに囲まれて、とても静かな美しい景色の村だったそう。

そこに住んでいる人々もみんな気のやさしい人たちばかりで、村中が仲よく助け合って暮らしていたんだ。

それが大正の終わりがころ川筋をまっすぐにするために、村中が住みなれた島を立ちのいて新しい土地に住むことになったんだ。

そして寂しい思いで移転も終わり、やっとみんなが落ちついた生活になり、再び静かな村里になってきた折、大変なさわぎが持ち上がったんだ。

大きなさわぎというのは、一人の漁師が仕事を終わって舟から家に帰る夜道で、人魂を見たとい



かつて三斗山島があった一帯。町民会館屋上から西方を望む。

「うわさ」だった。

村の中でも人魂を見たという人々があらわれ

「青白い光をして長いしっぽのような尾をひいて通りすぎた」とか、

「いや、わしが見たのは赤黄色の漁火のようだった」とか。

だんだん、うわさが大きくなって広まり、子供や女たちがこわがって夜は家の外へ出なくなってしまうた。

そこで勇氣ある若者が、

「よし、今晚俺が見届けてやる」と意気まき、

一晩中外で人魂の出るのを見張っていたが、一向に人魂は出ず、そんな「うわさ」はデマだということ



三斗山島

三斗山島は木曾川河川敷の細長い中洲で、面積は5万5,000㎡。笠田島と渡島間に位置し、30世帯180人余の人々が度々の洪水にもひるむことなく、互いに助け合っているわいし村をつくっていました。

ところが、大正12年から始まった木曾川新河道形成工事のため、大正14年までに村中が全戸移転。三斗山島は全島、木曾川本流の河床となってしまいました。

移転50周年を迎えた昭和50年、三斗山島の東端であった川島大橋南詰に、父祖の住みつた故郷・三斗山島を去った30世帯の後継者の人たちにより、記念の石碑がたてられました。写真一。碑の裏には「三斗山島の跡」と刻まれ、裏には当時の戸主名などが記されています。



それから、人魂が出るという
「うわさ」は全くなくなったと



になったんだと。

ところが数日後、また人魂を見たという人たちが出てきて、再び村中が大きなわきになったそう。

一人だけ見たというなら疑いたくもなるが、続いて二人三人と見た人がふえてきたと。

そしてその人魂は、元の三斗山島のお墓から出るという評判になった。

立ちのきの終わった島には誰も住んでいないし、お墓も取り去られてしまっているんだよ。

そこで、村の古老たちが相談の上、元の三斗山島にみんなでおかけ、お墓のあった所を掘りおこして調べたんだと。

するとどうしたことだろう。
一つだけ石塔が残っているのが見つかったんだと。

「これは申し訳ないことをした。お墓を移す時よく調べたのに。きっと砂に埋れて、気づかなかつたのだろう」と、さっそくみんなで読経の上、新しい墓地へ移しかえたそう。

ヤロカの大水

昔、連日の大雨続きで、昼なお暗く、豪雨の襲来に人々が恐々としていたときがあったそう。

村の人々は降り続く雨をにくらしげに見上げながらつぶやいていた。

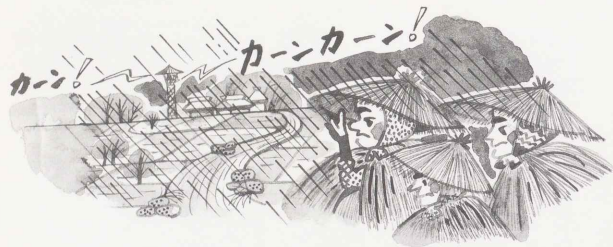
「困ったことじゃ。」

どれだけ降ったら降りやむんやろ。

このぶんやと、また堤が切れるかもしれん」「この前の大水で床の上まで水浸しになったばかりなのに、神様や仏様はどうして俺たちの所ばかり苦しめるんやろ」村中の道は、まる



天正14年頃の川島周
辺の川の流れ



で小さな川のように流れ、畑にはもう、うねに水がついていた。

木曾川の本流では、赤くにこった水が波がしらをたてて、まるで狂ったように下流へ流れていた。

そんな夜「カーン、カーン、カーン」と半鐘が鳴った。

村人たちは、みの、かきに身をかためて堤へ急いだ。

もう早くかけつけた人たちは、依に土をつめ、それを縄でしっかりとくくり、堤の上に積み上げていた。

集まってきた村人は、みんな

木曾川沿いの各地に伝わる 「ヤロカの大水」

信濃の鳥居峠を源とする木曾川は、途中、無数の細流を集め、濃尾平野を網の目のように流れています。昔から木曾三十六流ともいわれ、一度洪水ともなれば本流、派川が自在に連流し、河運の便達が極めて楽しく、災害もはなはだしいものでした。このため「暮れん坊木曾川」の異名さえあります。

「ヤロカの大水」の伝説は川島町のほか、江南、太田、犬山、扶桑、大口など、木曾川沿いの村々各地に伝わっています。

江南市の船若地区にはこんな話もあります。船若には中と下はあっても上はない、というのも「ヤロカの大水」によって上船若地区が流されてしまったからだ、というものです。

いずれにしても史実のかけに咲いた伝説であり、川島の人々や木曾川沿いの人々がかいかに洪水に苦しめられてきたかを物語る伝説と言えるかもしれません。

いつの時代かはっきりしない

さてヤロカの大水は、いつの時代の洪水だったのでしょうか？木曾川の洪水は古代から近世にかけて何度も起きています。ですから、どれがヤロカの大水に相当するかは、はっきりしていません。

ちなみにこの地方の大洪水を、年代順に記しておく...

- 養正 3年(769年) ● 宝龜 6年(775年)
 - 貞觀 7年(865年) ● 天正 14年(1586年)
 - 慶長 15年(1610年) ● 元和 3年(1617年)
 - 貞享 4年(1687年) ● 享保 6年(1721年)
 - 天明 6年(1786年) ● 安政 4年(1857年)
- と、数多く、河川改修が行われる昭和初期まで続きます。



声で叫んだそうなの。
「ヨコサバヨコセ」
すると恐ろしい雷鳴とともに、それこそ盆をひっくり返したような大豪雨が降りしきり、川水は一度に津波のようにふくれ上がり、堤はたちまち切れ、田や畑はもちろん、人や馬、家や財産が水の底に沈み、みんな押し流されてしまったそうなの。
俗に、この大水を「ヤロカの大水」と呼んだそうなの。



必死になって土のうつくりに
励んだ。

と、そのうち暗黒の雲の中から
激しい雨音とともに「ヤロ
カー、ヤロカー」という声が
不気味に聞こえてきた。

みんなびつくりして自分の耳
を疑った。

「俺も聞いた」

「わしにも聞こえた」

村人たちは小声でささやき、

ヤロカーという声の方を見上

げて、みんなでふるえていた

そうなの。

そのうち、気の短かい村人が、

がまんできなくなって大きな



子供のない寂しさを紛らわすように弥五七さんは朝早くから夕方遅くまで畑仕事や大工仕事に励む働き者だった。

仕事の暇を見ては、あちこちのお宮やお寺、地蔵様や観音様などに「子供が生まれますように」と祈願したが、だめだった。

そこで弥五七さんは、竹を育てることに努めたそう。

夏には朝早くから堤や渡船場近くの道や川原の草刈りをして、村中の人たちが通りやすいようにしてやり、さらには刈り取った草は堆肥にして畑や竹藪に入れてやった。竹の成長をわが子のように見守り、



むかし、むかし、渡島にたいへん夫婦仲のよいおじいさんとおばあさんが住んでいた。

おじいさんは弥五七と呼ばれていたそう。

二人はまるで、おしどりのように仲睦まじく連れだって出かけ、村の人々にうらやまされていたんだ。

ところがどうしたことか、二人の間に子供が授けられないので、どことなく寂しそうだった。



かわいがってやったそうな。

冬の雪が降った日には一本一本雪落としをして、竹が折れないようにしたんだと、それで弥五七さんの竹やぶは、近郷近在にない竹が育った。

遠く江戸や京都の方からわざわざ買いに来る竹商人もいて、弥五七さんの竹は高い値で売れたそうな。

お金がたまると弥五七さんは、みんなのために使ったんだと。渡船の費用にしたり、道直しの金に当てたりして、決してお金のあることを自慢するような人ではなかった。

だから村中の人から好かれ「弥五七さん、弥五七さん」と、慕われていた。

また弥五七さんは、外出のときはいつも腰に袋を下げて出かけ、落ち穂や木の実などを拾い集めていた。

そして雪の降った日など、庭先や竹やぶに来る小鳥たちにそれを与え、いつくしんでいたそうな。

ところがある年、おばあさんが働きすぎて病気になるってしま

った。

弥五七さんは一生懸命看病してやったが、そのかいてもなく亡くなってしまった。

弥五七さんは悲しみあまり自分も病床に伏してしまったそう

な。

村中の人々が代わる代わる見舞に行つて看病した。

ある日弥五七さんは「村の衆、いつもみんなでお見舞いに来てらようっておおきに、もしも、わしが死んだら、





笠田町内の白鬘神社

笠田の氏神さま と洪水



昔、むかし、そのむかし笠田の村はたびたび木曾川の洪水に悩まされていたそうなの。ある年のこと、毎日毎日雨が降り続いて、木曾川の水は見る見るうちにかさを増して、そこらあたり一面水びたしになってしまった。そのころ木曾川の本流は今よりも北の長森あたりを流れとったんだ。ここらあたりは、ふだんは小川のような水の流れ

弥五七さん

この民話は、昭和63年に当時川島中学校3年の川瀬真由美さんが、郷土に伝わる古い話の研究をした資料を基に、さらに数名の古老から聞き取りをしてまとめられました。

渡町には250年余り前から“弥五七さんの供養”という伝統ある祭祀が続けられています。この供養は渡の東組(川瀬の組)の人が交代で当たっています。

弥五七さんの石碑は、弥五七さんの竹やぶの中にありましたが、現在は移し変えられて渡の墓地に建てられています。表には「南無阿弥陀仏」と記され、横に寛政10年(1798年)とありますから、ここへ移し変えられたのは今から約191年前ということになります。

また、川瀬信治さん宅では、二百回忌法要の折の木札が見つかりました。これには「俗名弥五七二百回忌法要享保十九年二月十三日往生 釈道隆信士」と書かれています。弥五七さんは今から225年前に亡くなったことがわかる貴重な資料です。



渡の墓地内にある弥五七さんの石碑



あの竹やぶを村のために役立ててくださったや」と言い置いて、数日後静かに眠るように亡くなったんだと。
弥五七さんのお弔いの後優しくして親切だった弥五七じいさんを村中で供養することが決まり、今でも続いているそうなの。

じやったそうな。

だがあの晩の川はいつもと違って、ごうごうとものすごい音をたてて木曾川の流れを変えてしまったんだと。

小川のような流れも海のような様子に変わってしまった。

そして人家よりも一段と小高いところに祭ってある氏神さまのお社ウヂノミヤにも水がつきはじめってしまった。

そこで村の元老ゴロウたちは、ホ

ラ貝を吹いたり一本太鼓を

たたいたりして、村の危急

をみんなに知らせたんだと。

「こんな恐しいこと生まれ
てはじめてだ！」

「まるで海の中にいるよう
だワ」

降りしきる雨の中、笠をか
むりミノを着て村の衆が集



まってきた。

「もうだめだノ東の突堤が切れてしまったゾー」

「おい、氏神様も危いゾ！」

「氏神様のおヤシロだけでも移したらどうじゃ！」

そして相談の結果、氏神様のおヤシロをお移しすることにな
った。

氏子の中から水泳の達人二

人が選ばれ、庄屋、神主も

ともに舟に乗りこみ、荒れ

狂う大水の中をお社へと漕

ぎ寄せていったそうな。

ところが川の水はいっそう

増え、高い波をたててお社

にぶち当たり、今にも流さ

れんばかり。

さらに風雨も一段と強まっ



古文書に記された民話

笠田町の白鬚神社は、昭和60年11月、白鬚社に昇格した由緒ある神社です。「尾張国神名帳」に従三位川島天神とあるのは、この社と言われています。

また「葉葉見聞集」には次のように記されています。「此社は川島十四村の産神にして祭礼は乙祭として往古より9月29日。昔時は此地の境内広くして諸本繁茂し、中には千年も経し梅の大樹ありしが天正14年丙戌年の洪水の高境地原流して川となる。所謂梅木川是也里民社を当地に移して再興し白鬚明神と称す」

この民話は「川嶋之神社白鬚大明神縁起」という古文書の中にあります。

八幡神社と九所神社のつながり

式内社川島神社については、奈良朝聖武天皇のころ(724-729年)、尾張国葉葉郡沼沼河島村に祭られていた、という伝説が残っています。しかし、鎮座所在がつまびらかでなく、松倉上ノ島の神明神社(通称小島の宮)とか松倉前河原の權神社(通称奥村の宮)とも、また宮田の川島神社とも言われています。いずれも決定的な証拠はありません。

また「濃陽史略」という本には、岐阜町徳田にある九所神社は洪水で川島から流れてきたのだと記されています。川島の人々が「神社を返してください」と頼みに来たけれど、徳田の人たちは「あの大水で神社が流され、それが私たちのところまで止まったのも何かの縁でしょう。九所神社の神様は、きっとこの徳田に鎮座されたいのです。お返しするわけにはありません。そのかわり、私たちの徳田八幡神社を、あなたがたのところにお移ししましょう」と言うので、それ以来、九所神社は徳田にあるのだそうです。川島町の八幡神社と徳田の九所神社にそんなつながりがあるとすれば、興味深い話です。



荒れ狂う洪水の中へ飛び込んだそうなの。

いかに水泳の達人でも助かるまいと思われたのに、不思議や

で、自分たちの舟も砕け
かかって危ない様子にな
ってきた。

そこで二人は「もうこれ
では社殿をお移しするこ
とはできない」と思い、

やむなく舟から水びたし
になっている社殿の中へ

飛び移った。

そして社殿の扉を開け、

ご神体を一体ずつふとこ
ろに入れ、帯で上下をし

っかりゆわえたんだと。

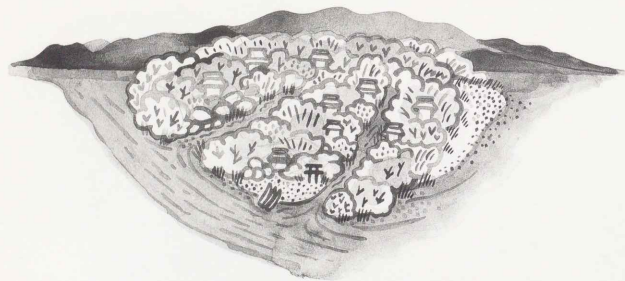
両手を合わせてお祈りし、

不思議、二人の泳ぐあたりは妙に波は静まり、流れはゆるく
なって無事岸に泳ぎつき、ご神体を助け出すことができたん
だ。

この大洪水で人家も社殿も御興もみんな流されてしまったそ
うな。

境内の千年もたっているという梅の木も、一丈余りの太い松
の木も杉の木も、すっかり失ってしまった。

しかし、神様のご加護があつてか、氏神様のご神体だけは助
け出せ、氏子の者たちは涙を流して喜んだとき。



のように昼間でも薄暗く、
 こわいようなところでした。
 そのころ大川には尾張の国、
 小松村への渡し舟があつて、
 小網と小松とで半年交替の
 当番で渡守をしていました。
 秋のある日、小網の彦一さ
 んは尾張の親せきでお嫁入
 りがあつて帰りが夜になつ
 てしまいました。
 渡し守は昼間だけで船頭さ
 んは引きあげてしまつてい
 たので、小松の次助さんに
 頼んで川を渡してもらいま
 した。
 ご馳走を右手に下げ、左手



今から何百年も昔、
 小網の辺りは人家は
 数えるほどしかなく
 ひなびた村里でした。
 村の周りは竹藪や大
 きな樺の木が、いっ
 ぱい生い茂つていま
 した。

村なかから南の大川

までの間には二本小さな川が流れていました。

川のふちには柳の木や、ウドンの木と呼ばれていたハンノ
 キやクルミの木、松の木などが昼でも暗いほど茂つていま
 した。

大川の近くに水神様が祭られており、その手前は小高い土手
 になっていました。

土手には松の木や女竹が入り交じつて生えており、まるで森



の後の方^{あき}についてくるではありませんか。
 彦一さんは何だか薄気味悪くなつて、もらつてきたご馳走を
 少し取り出して投げてやりました。
 するとそのケモノは後をつけてくることをやめ、投げてやっ
 たご馳走をおいしそうに食べ始めま
 した。
 よく見るとそのケモノは白い毛のキ
 ツネのようでした。
 「かわいそうに、このキツネ、腹を
 空かしているのか」と、彦一さんは、
 もう少しご馳走を与えて帰りました。
 それから後にも、彦一さんのような
 出来事^{出来事}が次々と起きました。
 それを小網では、キツネのお迎え^{お迎え}
 と呼んで村中の評判になりました。
 それで小網では尾張側へ



で提灯^{ていとう}を持って足元を照
 らしながら、とぼとぼと
 歩いて水神様近くへさし
 かりました。
 すると突然、水神様の茂
 みの中から、ビューンと
 犬のようなケモノが飛び
 出してきたのです。
 彦一さんは腰を抜かさ
 ばかりにびっくりしまし
 た。
 彦一さんが後ろを振り向
 いても、そのケモノは逃
 げもせず、飛びかかっ
 てくる気配もありません。
 それどころか、彦一さん

小杵の渡し

昔、今の町総合スポーツ公園の野球場裏南あたりに、尾張小杵への渡船場がありました。その後、明治の中ごろ、川筋が変わって神明裏（現江南市宮田）に移り神明渡しと呼ばれました。昭和の初めごろまでは古知野方面への渡船場として大衆繁盛したものです。

渡船場までの道は柳の木、松の木や女竹が繁茂しており、辺りにはキツネ、タヌキ、ウサギなどの獣が住みついて、一人歩きは大人でも心細い限りでした。

この話は、小網町の苅谷善市さん（76歳）が幼少のころ、祖父から何回となく聞かされたということ。江戸時代の終りごろから小網で語り伝えられているようです。



堤防のいなくなった水神様土か
現在は神社南に移されている



『ご馳走よばれ』に出掛けたときは、食べ残しの料理を別包みにして持ち帰り、水神様の茂みに住む白ギツネに置いてくれるようになりました。

それから数年後、彦一さんは尾張の親せきへ『法事よばれ』に出掛けました。

酒好きの彦一さんはすっかり酔っぱらってしまい、大川の舟着場にたどりつくくと、近所の和助さんが、船頭の身なりで竿を持って待っていてくれるで

はありませんか。

彦一さんを見て「遅うなった

なもし。迎えに来てあげたよ

と笑いかけ、舟を出して渡し

てくれ、家まで送り届けてくれました。

彦一さんは翌朝早速、和助さんの家へ行き



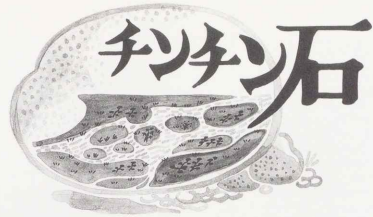
「ゆうべは、えらい世話かけて、すまなんだなも」

と、お礼を言うと、和助さんは「えっ？ 何やったな」

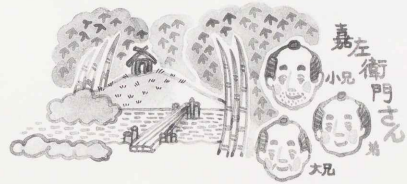
と昨夜の出来事は全く知らないと言います。

人違いをしたのかと、次々村の衆に聞いても、だれ一人心当たりの方がいなかったのです。

彦一さんは、さては水神様のキツネが和助さんに化けて迎えてくれたのだと気づき、昨夕、置き忘れた料理を早速届けてやっただけです。



むかし、むかし、その
 むかし、木曾川は、ま
 るでクモの巣をはった
 ように、幾つもの川に
 なって流れ、今のよう
 に本流というものはな
 かったそうな。
 きのう家の前を流れて
 いた川が、洪水の一夜
 が明けたらどこかへ消
 えてしまったというこ
 とが、たびたび起きた
 んだど。
 そんな木曾川の小さな
 中洲の島に嘉左衛門兄
 弟が住みついて、毎日



チンチン石

※八大竜王

法華経の金剛に列し
 た護法。
 龍陀・跋難陀・婆提
 羅・和修吉・德叉迦
 ・阿那婆達多・摩那
 斯・優鉢羅の八大竜王
 の総称。広辞苑。よ
 り

せつせと野良仕事に精を出しておった。
 丹精込めた作物も洪水で流され、水の泡となってしまっても、
 へこたれないで畑仕事に励む働き者だった。
 嘉左衛門は自分たちの島に洪水の被害が出ないで、村中が安
 全に暮らせるようにと願って、小高い丘に八大竜王の祠を建
 てたそうな。

村人たちは大喜びで、一本橋を渡った川向こうの祠にお参り
 を欠かさなかつたんだと。

ところがある年、長雨が降り続いて大洪水となり、八大竜王
 の祠も流されてしまった。

それで村の人々は、木曾川の川底から美しい大きな石を探し
 てきて、祠の重しにしたそうな。

「こんだけ重い石で押さえておきやあしや、もうどんな大水
 でも流されんわいなも」

「チーン、チーンという音、聞きやあたかーな。ええ音色じ
 やなあーさや」

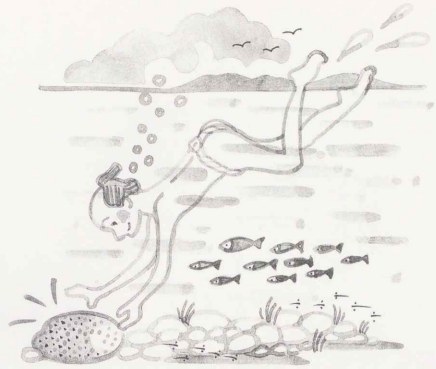




家にいるお寅爺さんにも聞かせてあげようと思ひ、「少しの間だけ、お借り申します」と小さな声でつぶやいて家に持ち帰ってしまったんだ。

そして系繰り舞輪の重しにして使っていた。舞輪が舞うたびに「チーン、チーン」と美しい音がするので、爺さんと二人で楽しみにして聞いておったんだ。

ところがある日、おかと婆さんの家のチンチン石辺りから火が出て、大火事になって家は全焼。



そんな村人のささやきが次々と伝わって、重しに使った石がいつの間にか「チンチン石」と呼ばれるようになった。

チンチン石を重しにしたものの、またしても大水で祠は流されてしまった。

村中総出で下の方まで探しに行ったが、どうしても見つからなくて困っていたとき、村人の一人が川底に沈んでいたチンチン石を拾い上げた。

それからはチンチン石を八大竜王のご本尊代わりにし

てお参りするようになったそうなの。

そんなころ島に住んでいたお寅爺さんと、おかと婆さんの夫婦。

ある日おかと婆さんは、お参りを済ませてチンチン石をたたいたら、「チーン、チーン」と虫の鳴き声のような美しい音色が聞こえた。

チンチン石

現在の北山町は、昭和31年町制が施行されるまでは高左衛門島と呼ばれていました。この島は江戸初期は円城寺村支村で幕府の直轄領でしたが元和元年(1615年)尾張藩領に変わりました。明治8年(1875年)円城寺村飛地となり明治23年(1890年)には同村から分離し川島村に合併しました。北山町辺りは海拔14.2mから12.4mで、川島町内で最も低く、それに築港地(尻無堤)のため、最も多く水害に遭っています。

チンチン石は現在、北山町宇道北1029の無格社神明神社境内に安置されています。今でもたたりを恐れて参詣する人が多いそうです。

この話は文化財保護審議会委員の野田薫さんが北山町の古老から聞き取り調査をしたものを、まとめたものです。



北山神明神社と
チンチン石の縮図

そして二人ともどこかへ
姿を消してしまった。

村人は、これはきつと

チンチン石のおたたりだ

と言って怖がった。

そして早速、元へ戻して

お参りをしたそうなの。

それから大水のたびに

祠が流されるので、チン

チン石を氏神の境内に移

す話が持ち上がり、チン

チン石の祠と横に植えて

あったツツジの木を一緒

に運んだ。

しかしその折、心ない人

が花の美しさに魅せられ、



ツツジだけこっそり自分の庭へ植えてしまったんだと。

ところがその人は程なく病にかかり、死んでしまった。

家族がびっくりしてツツジを元に戻したそうなの。

このようなことからこの島ではチンチン石の恐しさに驚き、

毎年お供えをしておたたりのないように村中で祭っているん

だよ。

縁結び・安産・子授けの
みよけとくす

夫婦楠



昔、むかし、天保という年号の頃、今の川島のあたりの木曾川には、十数個の島々が連らなっていました。木曾川の中州にできた村は、どこへ出かけるにも舟に頼って、大変不便な所でした。

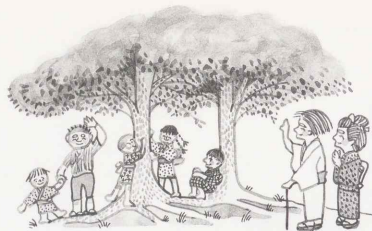
そして人の住き来もほとんどありませんでした。そんな頃のある年、十数個の島の中の嘉左衛門島へ若い侍の夫婦が渡ってきました。

「拙者は故あって身分をかくしている身でござる。誠に恐縮ではござるが当分の間、ご当村にかくまってもらえないか」と、島の庄屋の家を訪ねて頼みました。

庄屋は、逞しそうな若い侍と、美しいその妻を見て、これはきつと身分の高い格式ある家の方だと思つて、座敷に通し事こまかに事情をたずねてみました。



すると男の方は、木曾山林見廻り方を勤める武士の子息で、女の方は木材御用商人の娘とのこと、二人は相思相愛の仲であるが身分制度の厳しかった当時、士農工商の区別がはっきりしていて町人の娘が武士の妻になるのは中々むずかしい時代でした。相思相愛の仲でありながら縁組がととのわず厳しい父親の激怒にあい、さりとてあきらめるこ



そのうち二人の間に子供が生まれました。
 侍夫婦は、わが子の出産の記念と日頃村の人々に親切にして
 いただける御恩を感謝して、お宮様の境内へ二本の楠の木を
 植えました。

その楠の木が大きく伸びて行くのを我が子の成長ぶりのよう
 に楽しみにして暮らしていました。

ところが明治の世になり四民平等となった頃、
 風の便りに、厳しかった父も他界し、年老いた長
 生きの母の面倒を見るため、武士夫婦は子供を連
 れ、村人の温い見送りを受け別れを惜しみながら
 生れ故郷へと帰って行きました。

夫婦は島を去ったからも嘉左衛門島の人情のこま
 やかさや親切にしていた村人の温い心を忘
 れることなく、老いてからも、夫婦そろって時折
 この地を訪ねては、神社境内の楠の木の成長をな
 がめることを楽しんでいました。



ともかなわず、いろいろ思案の末、遂に
 二人は駆け落ちして、逃げ出し、そして
 自分見つかからないようにと思つてこの地
 を訪ねてきたことがわかりました。

庄屋さんは、すっかり同情して
 「それは、それはお気の毒なことじゃ、
 わしが、村の衆によく頼んで、かくまっ
 てあげよう」

と、村の人々にも事情をわからせて庄屋
 さんの家のはなれに、住まわせることに
 しました。

当分身をかくすために嘉左衛門島を運ん
 だ夫婦でしたが、村の人々が大そう親切
 で、何くれとなく面倒を見てもらえるの
 で住み心地がよく、どうどう住みついて
 しまいました。

楠の木は大きくなるにつれて、二本の木がまる

で一本の木のようになり、根株の方で一体となつてしまひ、村の人

々はその不思議さに驚きました。

「これは、きつとあの仲のよかつた、おしどり夫婦の心ねを
木の精が受け継いだのだらう」

と、その頃から誰言うともなく、この楠の木を「夫婦楠」と呼
んで、縁結びの木、安産の木、子授けの木として崇める人が
ふえてきたそう。

夫婦楠

夫婦楠のある北山町は、当時嘉左衛門島と呼ばれていました。此の島は江戸時代初期は幕府の直轄領でした。その後元和元年（1615年）尾張藩領に変わり明治8年（1875年）円城寺村の飛地となりました。

そして明治23年（1890年）に同村から分離して川島村に合併し松原島に編入されました。その頃から夫婦楠のおしどり夫婦の名にちなんで、この地を北山とも呼んでいたと言われています。昭和31年の町制施行に際し嘉左衛門島村を北山町と改名されました。この夫婦楠は神明神社境内にあって昭和60年12月25日川島町の天然記念物に指定されました。

夫婦楠は、目の高さの木回りか、南の楠は300cm、北の楠は280cmで何れも180年以上の樹令です。そして2本の楠の木は根の一部が地上で合体して、まるで1本の木のようになっています。



あとがき

川島町ふるさと史料館

館長 川瀬孝雄

このたび、川島町に長く語り継がれてきました「かわしまの民話」を刊行する運びとなりました。

川島町は、木曾川に囲まれた中州にあり、むかしから木曾川の恩恵を受けながら、また一方では、洪水で苦しめられた生活をし、川島の歴史を築いてきました。民話の中に川とのかかわりが数多く残されています。

この民話を通して自分の生まれ育ったふるさとを知り、語ることにより親から子へ、子から孫へと伝承し、ふるさとを見直し、大切にすることを養ってもらえれば大変うれしく思います。

この本を編集するに当たり、語材を提供して下さいました方、さし絵を書いて下さった方、その他なにかとお力添え下さったみなさま方に厚くお礼申し上げます。

採話協力者 町内関係者
採話文献 三斗山風土記
白鬘神社縁記
川島町史
表紙絵・挿絵 太田 英子
監 修 増田登美雄



かわしまの民話

平成6年3月10日 発行

発行所 川島町ふるさと史料館
岐阜県羽島郡川島町松倉町1951-4 〒501-61
TEL.058689-2811 FAX.058689-2884

印刷製本 杉江美術印刷株式会社
岐阜県羽島郡岐南町若宮地 〒501-61
TEL.0582-46-2291 FAX.0582-46-2294

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

かわしまの民話 絵図



